

四の女神と古龍の戦士

侑輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フォレストページにて亀更新連載中の『超弩級超絶学園』の外伝がここハーメルンにて始動する。紫の女神のツツコミ役のユウトの物語が、今始まる。

目次

第一話的な何か	1
第二話ですか？	5

第一話的な何か

幾多ある多次元世界の一つ。ゲームギョウ界と名のあるその世界では、四つの国とそれを守護する女神がいる。各国の女神は、国民の『信仰心』シエア』を力の源にしており、女神たちはその量を競っていた。

これはその内の、紫の女神が治める国の青年の物語。

Now Loading…

紫の女神が守護する大地、その名はプラネテューヌ。その市街地の中央に位置するはプラネタワー。そこではこの国の女神が居を構えており、それだけでなく女神をサポートする教祖、女神候補生、諜報部員も拠点としている。

その一室でこの国の教祖である司書・イストワールは、目の前の青年から報告を聞いていた。

「——以上で報告を終わります、イストワール様」

「ご苦労様ですユウトさん。成程、今日も我が国のシエアは…」

「残念ながら停滞気味です。ラストイション黒の国、ルウイー白の国、リンボックス緑の国は月に何度か首位が入れ替わっております……が、こちらのシエアが首位を取るのには年に一回あるか無いかです」

この二人はその原因を知っている。知ってはいるが、その原因となっている人物は悪気があつて現状を作っている訳じゃなかった。が見様によつてはそう見えてしまう。ユウトとイストワールは前者だ。そう信じていた。

会釈してイストワールの居る部屋をユウトは退室し、エレベータに入り指定の階を選択する。無音、無振動で動くこの箱はユウトを載せてその階へと向かう。

一分も満たない内にその階に到着する。彼を出迎えたのはこの国の女神候補生、ネプギアである。

「あ、おはようございますユウトさん」

「ういっすギア子。今日もシエア集め？精が出るよなアンタは」

「あはは……」

苦笑いをするネプギアをよそに、ユウトはこの階……この国の女神の部屋を見回した。ゲームソフトやハード、攻略本や飲み終えたペットボトル数本を見なければ普通の部屋。一般的なりビングルーム三部屋程の広さだ。その部屋内を奥に進み、ユウトは一部盛り上がっている布団を見付けると、勢いよくそれを引っぺがした。

「くおら起きろボケ女神がああああ!!」

「ねぶうっ!!」

引っぺがした布団の下から、紫色をした短めハネっ毛のこの国を治めている女神のネプテューヌが素っ頓狂な声を上げて壁際まで吹っ飛ばされた。

「てめいつまで寝てんだボケ女神!!」

「えー、昨日いっぱいやったじゃーん」

「阿呆ー十分の一にも満たねーよ!」

仮にもこの国を治めている女神の胸ぐらを掴んでグワングワンと揺らしながらユウトは、反論するネプテューヌに更に怒鳴り散らす。脇ではネプギアが苦笑いしながら二人の攻防を見ていた。するとそこに、諜報部所属のアイエフが携帯電話を片手に現れ、ネプギアの隣に並んだ。

またか、と何度も見慣れた光景に二人そろって溜息を吐くしかなかった。

Now Loading…

「今日の仕事はいたってシンプルだ。よく聞いとけよ、特にネプ子。実は今朝がたある依頼が届いた……依頼主は明かさなくてもいいか、ある遺跡でモンスターが大量発生しているらしい。最近プラネテューヌのはずれで発掘され、今じゃ観光地の一つ」

「そんな所にモンスターがでちゃっているんじゃないか……」

「観光客は減り、ひいてはこの国のシェアがトップに上がる事は二度とないかもな。あくまで可能性の話だが、やらない訳にはいかねえな」

ユウトの説明にアイエフがもしもの仮定を言う。その事態を容易に想像して青ざめるネプギアとは裏腹に、ネプテューヌは暢気にプリンをスプーンで突いていた。

「大変だなあ」

「そうは言うがなネプ子、もしそうなりやあ……………今テメエが食ってるプリンが二度と食えなくなっちまうぞ。いいのか、食いてえ時に食えねえぞ」

「嘘っー!」

「やつと状況理解したなこの大馬鹿は」

事の重大さに気が付いた女神と共に一行はその遺跡へと向かうのだった。

Now Loading…

ユウトの標準装備は身の丈以上はありそうな深紅の大剣。それがペンダント状の待機状態になっており、今もユウトの首に下がっていた。見た目は竜の鱗を模したかの様なデザインで、その鱗はこの世界にいるエンシエントドラゴンのそれと酷似しており、大剣自体もそれで出来ていた。

その物言わぬはずのアイテムと、その持ち主のユウトは会話をしていた。

「で、エンシエント。問題の遺跡までどんくらいだ?」

「へもうすぐだ」

「そろそろ森を抜けますね」

ユウト達は遺跡に通ずる森を通っていた。一見獣道のようなだがこれが正規の道だ。豊かな自然であることがこの国の良い所である。そんな遺跡にたどり着いたユウト、ネプテューヌ、ネプギア、アイエフ、コンパの五人は、遺跡の現状を目の当たりにしていた。

そこにはフェンリル種のモンスターが数十体犇ひしめいており、足元には被害者なのだろう骸がある。フェンリル達はユウトらに気が付くと一斉に威嚇する。数十体ほどのうめき声など、ユウトらには無力だ。

「括目せよー！なあってねえー！」

「いただきますよおー！」

「エンシエント、バトルモード！」

先陣を切ったのはネプテューヌのもう一つの姿、紫の大地を守護するプラネテューヌの女神・パープルハート。続いてはその妹ネプギアが変身した女神の候補生・パープルシスターである。姉妹の親しい友人：諜報部のアイエフと医療班のコンパ。

そして、女神の力となり、剣となり楯となる青年ユウトがその大剣を手に、フェンリル達に切りかかる。

「行くぜ、ネプ子お！」

「ええ、ユウト！」

紅い線と紫の線がフェンリルの群れにぶつかった。

To Be Continued

第二話ですか？

遺跡に蔓延っていたモンスター達を退けたネプテューヌ一行。ただ駆逐だけではクエストは終了しないので、内部を含め遺跡周囲の散策を始めた。

範囲は狭く森に遺跡を中心に半径数メートル程にする。

「エンシエント、お前はどうか推論する？俺としてはここに奴らの餌っぽいのがあったと思うんだが……：そうでもなさそうだな」
「少なくとも、私もユウトと同じ考えだ」

今ユウトが立っているのは遺跡の周囲を見回しながら言った。フェンリル種の痕跡を調べ、ネプテューヌたちと合流して情報交換をした。ネプギア、アイエフ、コンパの三人もフェンリルの痕跡などを調べたり周辺を見居て回ったりしていたが、手掛かりとなるそれを見付けていない。最後にネプテューヌだが、見当たらない。いつもの事だと呆れつつも周囲を見回すと、ネプテューヌの物らしき靴跡が遺跡の入り口の方へと続いていた。

一度別れてそろそろ三十分が経過しようとしていた。

「迷ってるな」

「迷っているな」

「迷ってますね」

「迷ってるわね」

「ねぶねぶ迷子ですう……」

好奇心に勝てなかったのか、何か気になるモノを見付けてそれを追ったのか、兎に角今は手のかかる女神様を探しに行こうと、ユウト達は遺跡内部へと進行する。

携行していたライトのスイッチを押し、真つ暗闇な遺跡内部をユウトラは進んでいく。壁には重要にも思える壁画の表面には、古代ミファース文明の時代に見られる文字やその時代にあった出来事を記す壁画が掘られているだけだ。

「アイエフ、確かこの遺跡は何年か前に見つかったんだろ」

「ええそうね。プラネテューヌのデータベースに記録も残ってるけど……」

突然何かを見つけたユウトはアイエフ達に足元を指差して見せた。そこにあつたのは、つい最近踏まれた形跡のあるトラップが一つ、その他には先人たちが分かり易くしたのだろうトラップの傍には分かり易く黄色と黒の注意線があり、トラップを囲んでいる。それに対し、踏まれた形跡のあつたトラップには注意線が無かった。

行方不明のネプテューヌ、遺跡内部に続くその足跡、注意線の無い踏まれた形跡のあるトラップ。これらの事から推測する事はただ一つ。

「あのバカ入ってすぐ罠に掛かりやがったな」

ユウトのその言葉に、アイエフたちは全力で首肯した。足跡を辿ると、その他にも様々な罠にもかかった事が分かり、ユウトは頭を抱えた。

「どうしてこーなのかねアイツは」

「はいはい、落ち着く落ち着く。ねぶ子見つけてから叱りつけなければいけないの」

「だよなー、ギア子はあるまじ怒らねーし、イストワール様は怒ってもあいつ反省すること少ないし……とにかく見付け次第どうすつか」

固まって行動するユウト達。下手に別れて散策するとネプテューヌの二の舞を演じてしまう恐れがある。それはコンパも理解している。幸い他の罠には踏まれた形跡は見られない。四人はトラップに掛からない様に細心の注意で奥へと向かう。

Now Loading…

最深部まで近づくうちに、壁画の数が多くなっていた。古代文明の記録とされているそれらをユウトらには楽しんでいる余裕はなかった。しかしモンスターの陰どころか息吹すら感じない。元々そういうモノなのかどうかはユウト達は知らず、今も絶賛迷子中のネプテューヌを捜し歩き続けていた。

数分あるき続けると、突然ユウトが何かに躓いて転倒してしまつた。一体何に躓いたのか、ユウトは確認する。そこには、右手には齧りかけの怪しげなキノコを握りながら目を回して気絶していたネプテューヌだった。

「……コンパ、コイツの手のキノコが何か分かるか？」

「え、と……確かヘンカダケですう。これをねぶねぶは食べちゃつたみたいです。最近見つかった種類で、食べたらどうなるのかはまだ知られてないそうですよ」

「何はともあれ、ネプテューヌは見つかったんだ。帰るとしよう」

エンシエントの一声にユウト達は賛同し、アイエフは懐からダンジョン脱出アイテムを起動する。アイテムを中心に発光し、光がユウト達を包むと一瞬の内にプラネタワーへと送り飛ばした。

光が止んだ暗いダンジョン内。岩陰から二頭身ほどの生物が姿を現した。

「もう行つたつちゅね。それにしても、女神が来た時はさすがにヤバかつたつちゅが……あきらかに罨なのにかかるとは、敵ながら情けないつちゅね」

「生物は小さな肩をすくめていた。」

「さて、仕事に戻るつちゅよー」

そう言つて生物は暗闇の中へと消え去つて行つた。

Now Loading…

翌朝のプラネテューヌ。

プラネタワーの上昇するエレベーターの中でノワール、ブラン、ペールの三人がネプテューヌの自室を目指していた。今回ここに来たのは、ユウトから呼び出されたからで、正直嫌な予感しかしなかつた。ネプテューヌのゲームの誘いはあれど、ユウトの誘いは今まであつたかどうか。

エレベーターが目的の階に到着。密閉された箱の入り口が開き、三人は出迎えのユウトの後に続き、ネプテューヌの部屋へと向かつて

行った。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d